The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	リーディングと連携したアカデミック・ライティングの実践研究ー学部留学生を対象にした思考ツールの利用ー
Author(s)	脇田, 里子
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/52089
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　脇田　里子　）	
論文題名	リーディングと連携したアカデミック・ライティングの実践研究 －学部留学生を対象にした思考ツールの利用－

論文内容の要旨

学部留学生（主として、文系学部2年生次）を対象に、日本語ライティング教育方法の提案とその授業実践について議論した。学部留学生の抱えるアカデミック・ライティングの問題として、先行研究（村岡, 2007; 脇田, 2012など）から、文章構成の問題点が大きいことを示した。その問題点（①段落に関する問題、②論理的思考の未熟さに関する問題、③構想の不十分さ）の解決を目指すことを目的とした。問題点解決のために、「リーディングとライティングの連携」と「思考ツール（思考内容や思考推移の要点を全体把握する視覚情報）」の観点から次の議論を展開した。

(1) 思考ツールを利用したライティング連携によるリーディング方法の提案（第3章）

(2) (1)のリーディング方法を導入したライティング方法の提案（第4章）

(3) (1)と(2)の授業実践による結果の分析と考察（第6章）

第1章では、上述した研究の背景、目的、対象、方法について述べた。

第2章では、研究の枠組みとなる先行研究として、第二言語教育における「リーディングとライティングの連携」に関する研究（Hirvela, 2004; Tirney, 1992, Grabe, 2001, 二通, 2006; 山本, 2006など）を示した。次に、本研究の学習支援の手段として、リーディングやライティングを支援する「思考ツール」に関する先行研究（ミント, 1999; 伊藤, 2001; 牧野, 2010; Mohan, 1986など）を示した。こうした先行研究を踏まえ、本研究では、思考ツールを利用したリーディングとライティングの双方に利用できる論理的思考力の学習支援を提案した。

第3章では、リーディング学習支援の提案を行った。まず、リーディングにおいて、論理的に読むとは「適切な理由に基づいて主張をすること」であることを確認した。論説文のリーディングにおいて、1. 各段落を要約し、2. 各段落の関係を示した後、段落間の構造を分析し、3. 文章の論理構造を理解する学習を提案した。そして、3つのリーディング段階において、それぞれ、①「段落中心文表」、②「文章構造図」、③「ロジック・チャート」の思考ツールを利用し、文章構造の理解を深めることを提案し、その作成方法について説明した。

第4章では、ライティング学習支援の提案を行った。レポート作成の過程においては、リーディングの過程と反対の順に、①「ロジック・チャート」、②「文章構成図」、③「段落中心文表」の3つの思考ツールを作成した。リーディングとライティングは、「文章（線条構造）」から「思考（論理構造）」への過程が逆方向であるが、その過程は3つの段階に分けられ、「文章の論理構造」、「文章の段落構造／段落構成」、「段落の中心文」を理解する、あるいは、作成する点が共通していると思われる。よって、リーディングにおいて、文章構造を分析し、その論理構造の理解を深めるトレーニングは、ライティングにおける文章構成能力の養成につながると考える。

第5章では、第3章と第4章で提案した教育方法による授業実践の概要を示した。対象の学習者は、東アジア出身で学部2年次の6名である。実践後のライティング力の向上を検証するために、同一学習者が実践の前と後に作成した4,000字程度の「問題解決型」レポートを比較した。2つのレポート評価は日本語教員5名が行った。評価者は、実践前と実践後のレポートに対して、ルーブリック評価と講評の2種類の評価を下した。また、レポートを総合的に評価するため、学習者によるレポートの自己評価（ルーブリック評価と自己コメント）やアンケートによる回答なども参考にした。

第6章では、第5章の授業実践の結果を分析し、成果を考察した。まず、日本語教員によるレポート評価を概観した結果、実践後レポートの評価は、全員、実践前レポートより高くなったことから、ライティング力の伸びが見られたと言える。そして、ライティングの評価が高く、伸びが大きかった学習者（評価上位者）4名と、レポートの評価が中程度で、あまり伸びなかった学習者（評価中位者）2名の2つのグループに分け、その作成過程や特徴を分析した。

第7章では、結論として、本実践による日本語ライティング教育の特徴と今後の課題を述べた。特徴は、(1)ライティングのためのリーディング、リーディングのためのライティング、(2)思考ツールを利用したリーディングとライティング、(3)テーマを深める段階的ライティングによる授業実践である。今後の課題として、文章構成支援とは異なる観点から、(1)テーマ選択の重要性、(2)参考文献に関する課題、(3)評価項目の事前公開の必要性を挙げた。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

<table>
<tr><td colspan="3">氏　名　（脇田里子）</td></tr>
<tr><td rowspan="6">論文審査担当者</td><td>（職）</td><td>氏　名</td></tr>
<tr><td>主査　教授</td><td>鈴木　睦</td></tr>
<tr><td>副査　教授</td><td>真嶋潤子</td></tr>
<tr><td>副査　教授</td><td>筒井佐代</td></tr>
<tr><td>副査　教授</td><td>三原健一</td></tr>
<tr><td>副査　教授</td><td>村岡貴子</td></tr>
</table>

論文審査の結果の要旨

脇田里子氏の博士論文「リーディングと連携したアカデミック・ライティングの実践研究―学部留学生を対象にした思考ツールの利用―」を合格と認める。

本論文は、日本国内の学部留学生を対象とした日本語のレポート・ライティングの授業を主な分析対象とし、各種の調査結果をもとに、学習者の文章構成や論理展開についての問題を解決するために、リーディングとライティングの連携に着目した思考ツールの導入を提案し、その有用性を実証的に示そうとした意欲的な論文である。

本論文のテーマは、日本語教育の分野において近年一層重要性が増しつつある、学部段階からのアカデミック・ライティングの教育とその学習支援に関するものであり、日本語教育学以外の研究者や教員にとっても示唆に富む。また、日本語教育学、英語教育学だけでなく、広く他分野の先行研究も踏まえて、本研究の分析や考察と関連づけた記述を行っている。学習者が実際に書いたレポートや学習者、教員からのフィードバックといった多様なデータを丹念に分析した手法も手堅いものである。

段落中心文表、ロジックチャート、および文章構成図という思考ツールを授業に取り入れることにより、学習者をより高度なレポート・ライティングの文章構成や論理展開に導くことに成功しており、学習者による自己評価、教員によるルーブリック評価等を用いて多様な評価を行っている。全体の調査・分析の流れも明快であり、序論から結論への収斂に至る道筋もわかりやすく、具体的で説得力を持つ論文となっている。論文の随所に配置された、視覚に訴える効果的な図表からも、読み手に配慮した著者の地道な努力の跡がうかがえる。

本論文は、教員から学習者へという一方向の教育を分析するのではなく、思考ツールを用いたライティング活動に取り組む学習者自身のさまざまな変化の記述とその評価を扱った点で独創的であり、新しいと言える。学習者がライティングを学ぶ過程において、丁寧に段階を追って論理的思考を促すツールを導入し、そこでの個々の学習者の気づきや困難点、成果物としての文章全体の構成や論理的側面の変化、ライティング活動自体に対する認識の変化にも言及して議論を行ったことは意義深い。本論文で提案されたライティングの指導方法は、言語表現に重点をおいたモデル提示とそれを用いた練習を基盤とした狭義の伝統的なライティング教育の捉え方とは異なるもので、今後この分野においてますます重要な位置を占めるものと期待される。

以上のことから、審査委員は全員一致で本論文を、博士（言語文化学）の学位にふさわしいと判断した。

以上